



ブエノスアイレスの街並み

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスは東京の真裏、故に日本との時差は12時間で季節も真逆と、日本からは時間的にも感覚的にも、遠い国だ。

イメージとしては、サッカーやタンゴ、ステーキやマルベック種ワインなどが一般的だが、駐在していて実感するのはステレオタイプにとどまらないさまざまな『豊かさ』だ。

まずは自然。アルゼンチンの

国土面積は世界第8位（日本の7倍）、その気候も亜熱帯から氷河地帯まで有する南北3500キロメートル以上の長さを有する。

夏の体感温度50度超となる北部の光景はまさに他の惑星のようであり、他方某有名スポーツウェアの会社名由来ともなっている、南部パタゴニアに行けば普通にペンギンが海岸を闊歩する様子を見られるなど、国内

にいながら多様な経験ができる。

次に資源である。国土の多くを肥沃な草原が覆っているのに対して、人口は4000万程度のため以前から世界的な食料輸出国の一つとなっている。

現在でも大豆が世界第3位、牛肉は世界第4位の輸出国。エネルギー資源にも恵まれており、最近話題のシェールガス資源埋蔵量は世界第2位と

されている。

エスプレッソが基本

文化環境の豊かさも特筆すべきだろう。国民に占める欧州系移民の割合が9割近いため、ブエノスアイレスの雰囲気は欧州そのもの。美術館や図書館、カフェなどが優雅な建物と共に街の至る所にある。

また、イタリア系移民が多いこともありコーヒーは基本エスプレッソ、街中は深いりコーヒー豆のほのかな香りに覆われている。

複数のノーベル賞受賞者（医学賞2人、平和賞2人、化学賞1人）に加え、著名な音楽家や建築家なども複数輩出した文化レベルの高い国だ。

アルゼンチンといえば経済的にはいろいろと世間を騒がせているが、以前は世界第5位程度の経済規模を有した先進国であった。

数年前に世界3大歌劇場の一つとされるテアトロコロンを訪



れた際、最上階立見席がピアスにサンダル履きの若者たちであふれていたのを見た時には、定量的な経済指標は別として、当地が相変わらずの『先進国』だと実感させられたのを今でも強烈に覚えている。

今年（2016年）は日本とアルゼンチンの外交関係樹立120周年の年にあたる。また、南米地域で初めて、G20（金融世界経済に関する首脳会合）サミットが開催されるなど、何かと話題の多い1年だ。『先進国』アルゼンチンの今後に目が離せない。

（国際協力銀行ブエノスアイレス駐在員事務所 首席駐在員

鈴木 将仁）